

## チューリッヒ日本人学校に勤務して

中標津町立広陵中学校

教諭 増田 慎一

派遣国 スイス連邦

派遣期間 2009年4月～2012年3月

### 1. 派遣国の概要

#### ○公用語

- ①ドイツ語（スイスドイツ語）64%
  - ②フランス語 19%
  - ③イタリア語 8%
  - ④ロマンシュ語（昔から使っていた現地語）9%
- ※英語は2007年から義務教育の中で扱われるようになる。



国民全体が英語を話せるわけではない。

#### ○首都 ベルン

#### ○都市 チューリッヒ、ジュネーブ、バーゼルなど

#### ○人口 約7,570,000人

#### ○面積 41,290km<sup>2</sup>（九州より少し大きいくらい）

#### ○通貨 スイス・フラン（CHF）

#### ○スイスは連邦国家であり、26の州に分かれ、直接民主主義制を取る。

○チューリッヒ日本人学校の施設に関してはウスター市の全面的な協力が大きく、今でも2年に一度「日本の日」と称した、市と日本人学校の交流が行われています。ウスター市長をはじめとする関係者の挨拶、日本人学校長の挨拶、プレゼンテーションののち、現地校と日本人学校の子どもたちが演奏や発表を互に行い、最後には保護者も交えて立食会を開いて下さいます。東日本大震災時にも、チューリッヒ市街、ウスター市街地などでチャリティー活動が盛んに行われました。

○2009年9月から、日本スイス自由貿易・経済連携協定が結ばれ、日本企業がスイスに進出し易くなりました。現在少しずつではありますが、新たな日本企業がスイスに進出し始めています。日本人学校の需要も高まるものと期待されています。

#### ○派遣国の生活全般にかかわって

- ・物価：基本的に日本の2倍程度。加工品など人との手が入ったものは高いが、野菜や米・肉などは日本よりもずっと安く買うことができます。
- ・経済状況 大変安定しています。
- ・治安 周辺諸国よりはずっと良い環境にあります。しかし、スリや空き巣などは存在し、邦人旅行者が多数被害に遭っています。また、都市によって犯罪数が異なります。特にジュネーブ周辺の都市では、犯罪が多いと言われています。
- ・余暇の楽しみ方を知っている国民です。美しい自然を満喫し（湖で泳ぐ、サイクリング、ジョギング、乗馬、ハイキング、登山など。）家族と過ごす時間を大切にしている国民です。

## 2. チューリッヒ日本人学校の概要

- ・チューリッヒ市街から15 km離れたウスター市にあります。
- ・児童生徒数 H21年度 24名（小学生18名、中学生6名）  
H22年度 13名（小学生9名、中学生4名）  
H23年度 13名（小学生11名、中学生2名）
- ・保護者の職種 大学関係、医者・医療関係、工業機器関係、金融関係、化粧品関係など
- ・教職員数 校長1、教諭6名（2012年度からさらに1名減になっています。）、事務1名、現地採用時間講師3名
- ・施設： 図書室（PC設置）、理科室、家庭科・音楽室、図画工作室  
体育館（床暖房）、グラウンド、ドッチボールコート（野外）  
隣接して市営の屋外プールがあります。



ウスター市は、チューリッヒ州第3の規模を持つ自然環境が豊かで歴史のある街です。学校はウスター駅から徒歩で5分。ウスター教会・ウスター城のふもとにあります。校舎は、5階建ての旧繊維工場の1、2階部分を普通教室・特別教室に改装して借用しています。

本校の前身は、1975年に開校した「日本語学校」です。当時は、チューリッヒ市内にある日瑞協会のクラブを借りて週2時間の国語の授業を行っていました。その後、全日制日本人学校設立への機運が高まり、在スイス日本国大使館、日本人会、日本商工会、当時の職員らによるはたらきかけにより、設立委員会が設けられ、1986年、チューリッヒ州より、学校法人として「チューリッヒ日本人学校」設立が認可されました。翌1987年には、補習授業校教頭が派遣されました。そして、同年11月には、ウスター市議会の校舎借用承認決議を受け開校の準備が整い、1988年4月初代千葉校長ほか4名の派遣教員と現地採用事務職員のスタッフがそろい、4月23日に児童50名、生徒7名で開校式が行われました。

その後、教室拡張、改修工事、校庭拡張工事が進み教育環境は整ってきましたが、1993年をピークに年々児童生徒数が減少し、2000年には20名までになりました。そこで、2003年3月の契約更新を前に、2002年8月に3階借用部分を返却し、1、2階部分を改築し借用部分の規模を縮小しました。

現在も児童生徒数は20名を切る年度が多いのですが、恵まれた学校設備、教育環境の中で学習に励み、伸び伸びと元気よく活動しています。

## 3. チューリッヒ日本人学校の教育

### 1 基本理念

#### (1) 本校教育の願い

スイスの恵まれた教育環境を生かし、日本人としての誇りを育てると共に、豊かな国際感覚を養いながら、児童生徒一人ひとりの個性・能力の伸長を図り、「未来に生きてはたらく力」を育む教育の創造に努める。

#### (2) 本校の教育目標

自ら学ぶ意欲と学ぶ楽しさを味わわせ、自他を思いやる豊かな心を養い、国際社会にたくましく生き創造性豊かな子どもを育成する。

### (3) 目指す子ども像

- ◎ すすんで学習にはげむ子 (知育)
- ◎ 思いやりのある仲のよい子 (徳育)
- ◎ 明るく強くきたえる子 (体育)
- ◎ スイスの友と学びあう子 (国際理解)

### (4) 学校経営基本方針 (2010・2011 年度)

- ◎ 「行ってよかった・行かせてよかった」と言ってもらえる魅力ある学校づくりに努める。
- ◎ 互いに切磋琢磨し「働いてよかった」と言える学校を目指す。
- ◎ 目指す学校像

楽しさ・やる気いっぱいの学校

美しい学校	真剣な授業
さわやかな挨拶	大きな歌声

- ⑤ 本校の実態に即した特色のある教育課程を編成し、確かな学力の定着を図るとともに、児童生徒一人ひとりの個性を伸ばす教育活動の展開に努める。
- ⑥ 積極的に地元校との交流の図り、国際感覚と豊かな心を培う。
- ⑦ 計画的・組織的に研修を行い、指導力の向上に努める。
- ⑧ 家庭・地域社会・関係諸機関等との連携を深め、開かれた学校づくりを行う。

## 2 特色ある教育活動

### (1) 国際理解教育の充実 (現地校交流)

- ① 小学生→ピュント校 (小学校)
- ② 中学生→クレメアッカー校 (中学校)
- ③ 合同体育授業 (中学部のみ、2・3学期に7回程度)  
→フライシュトラッセ校 (中学校)

小学生・中学生とも年に最低2回、現地の小・中学校と交流をしています。どちらも徒歩10分程度の場所に位置しています。交流では、現地特有のゲームを教えてもらったり、日本からは太鼓のたたき方の講習や日本で昔から伝わる遊びやゲーム、スポーツなどを交流します。児童生徒は、授業で習っているドイツ語を使い司会や説明をするように努力しています。

本校独自の特殊な交流は、現地校との合同体育授業です。生徒の数が少なく、チームプレーを必要とするスポーツができないことから現地の中学校にお願いして、一緒に体育の授業をするものです。バレーボールやサッカーボールなどを行っていますが、冬には日本の競技である柔道を現地の子どもたちと一緒に体験します。学校から5分ほどの場所に柔道場があります。



## (2) 補習校との交流

- ・日本語補習校の児童・生徒数：約180名
- ・校舎・設備を共同利用。月～金は全日制日本人学校、土：日本語補習校

- ①合同運動会
- ②ゼクセロイテン（宗教的行事）のキンダーパレード
- ③太鼓の指導、手伝い。
- ④保護者会バザー
- ⑤体験入学で共に活動
- ⑥補習校支援（互いに国語の研究授業、事後研究会）



ゼクセロイテン・キンダーパレード（4月）

## (3) スイスの伝統的な活動に参加・体験

- ①ゼクセロイテン・キンダーパレード
- ②ウスターマルクト（ウスター市の農作業マーケット）
- ③職業観の育成

小学生は近郊のゴミ収集場（リサイクル施設）や自動車販売店、マーケットなどを取材。

中学生は、ベルフスメッセ（職業見本市）、職場体験を実施。



職業見本市（パン作り）

## (4) 自然を生かした行事活動

- ①ユッカ牧場でイチゴ狩り（小低学年 生活科）
- ②キンダー動物園で動物と触れ合う（低学年遠足）
- ③宿泊学習 サマーキャンプ（小学3年生以上）
- ④宿泊学習 スキー教室（小学3年生以上）
- ⑤スケート教室（小学1・2年生）



ゴミ収集場取材

## (5) 現地採用教諭によるネイティブな英語とドイツ語教育

- ・州の条例で、ドイツ語教育を週に2時間行わなければならない。
- ・小学1年生から英語教育も実施
- ・英語派遣教諭は、主に英文法や受験英語を担当。



サマーキャンプ（7月）

## 4. その他 スイス（チューリッヒ州）の教育（スイスは州によって教育方針等が異なります。）

スイスの教育は日本とだいぶ感覚が異なっています。就職の仕方、仕事に対する考えが違うからかも知れません。



スキー教室（1月）

- ・高校進学率は、なんと3割程度しかありません。高校へ進学する者は、将来の職業がだいたい決まっています。（医者、弁護士、政治家、研究者など）

通常は中学2年生から就職活動を行います。日本の小・中学校で行っている「職場訪問」「職場体験」が、さらに本格的になった職業見本市（ベルフスメッセ）が約10日間にわたって開か

れます。そこで生徒たちが興味ある職業を実際に体験したり就職したての若者からどんな人材が適しているか、学校では何を努力すべきかなどを直接に聞くことができます。その期間はチューリッヒ州の全ての中学2年生は、自分の職業探しの時間に充てます。

この見本市のほか一般の企業に数日間体験に行くこともできます。その職場は自分自身で探します。学校職員が探したりしません。学校は生徒の要望を許可する立場です。

- 中学校を卒業した後は、2年～3年間ほど職業訓練校に通いながら仕事をします。
- 就職先は自分で見つけ、職業訓練校を卒業したあとは正式に雇ってもらう契約を取り付けなければなりません。
- 仕事が自分に合っていないと思った時は、職業訓練校や資格を取るための塾などに通いながら仕事を続けます。新たな業種の資格を取った後は、別の仕事に就くことができます。たくさんの資格を取って実践を積み重ね、最終的に大卒と同じ医者になることも可能です。その時は大卒の医師よりも給与が高いと言われています。

社会人になって、必要性を感じたときに学習しますので、真剣に取り組みます。

- 年間の最低金額が法律で義務づけられています。(現地の方の話では約600万円です。1 CHF=100円としてます。) 中卒の初任給は約40万円です。中卒でも十分生活でき、自分に合っていないと思えば職種を変えていけるので、中学校卒業後に高校へ進学しなさいという保護者は、日本よりずっと少ないのです。



#### • 学校経営

校長の職務を作ったのは2004年くらいからです。それまでは、学校の代表者を周り番で努めるような体制でした。各学校は直接教育委員会とつながっているため、教育委員会が日本の校長職務を一部担当しているようなシステムです。現在は、対外的な挨拶など必要なときがあるということで校長職を作っていますが、職員の代表的な扱いです。学校業務に関する大きな決定権はありません。

#### • 教育改革

幼稚園が義務教育化になりました。2010年から実施。幼稚園から小学1年に進級する時に審査があります。言語活動など十分に発達しきれていない場合は留年し、もう一度幼稚園に通います。義務教育は11年間です。幼稚園2年間。小学生6年間、中学生3年間。さらに進学する者は、高校3年、大学4年と進みます。また、学力が高く、将来高等学校へ進学しよう

としている児童は、小学6年生の途中で試験を受けて進級し、高校を目指す中学生と一緒に学習することができます。中高一貫の学校へ通うことになります。

- ・いじめについて

スイスでは、嫌がらせを受け続けている子がいると、教師は加害者ではなく、嫌がらせを受けている子の親に連絡を取り、何とかしないといけないと伝えます。(強い子どもになるように教育の仕方を考え直す。カウンセリングを受けに行くなど)嫌がらせをし続けた子の保護者は、連絡を受けると自分の子が、いじめられる側でなくいじめる側と聞き喜ぶそうです。将来自分の力で、自分の考えを述べて、自分の生活を切り開いていかなければならないという思いが強いのです。

- ・教育すること

スイスでは、全ての子どもが、全教科の成績を上げることを目指していません。人によって得手不得手があるのは当然で、苦手なことを無理に努力する必要がないという考えです。教師の目的は、生徒一人一人の特技や長所を見つけ出し、それを高めることにあります。高校数学の教諭は、「数学ができない子に数学を強要してどうする。その生徒には数学のセンスがないことを早く伝え、違う道を探すアドバイスをしてあげるのが教師の役目だろう。」と当たり前のように話してくれました。

大学でも同じ考えのようです。大学で数学を専攻している学生からの話ですが、一年間に2回テストがあつて、専門教科の試験が2度不合格になると、その学生はスイス国内では一生数学を学ぶことができなくなるそうです。つまり、他の道を探すしか無くなるということなのです。「適した道をしっかり探さない」という考えが根付いています。

現地校に通う日本人のお子さんがおられました。ドイツ語が理解しにくく、学習もなかなか理解できなかったそうです。保護者は担任の先生から家庭で何とかしなければいけないと強く指導されたそうです。そのおさんは、学級の中で先生からいつも厳しく指導されていましたが、ある時、ピアノが上手に弾けることが分かり、担任の先生の見方が一変したそうです。この子にはピアノがあるではないか！ということで、その子の可能性を見いだせたのです。

小学校や中学校で留年することも、授業終了後にカウンセリングを受けに行くことも恥ずかしいという意識はありません。自分の子どもは、たまたま、〇〇の力が弱いだけだ。留年してやり直すことで、将来に向けた力をきちんと着けて卒業させられると考えているのです。

## 5. 雑感 ～ 児童生徒理解に努めることが大切！ 日本と異なった子ども達の生活基盤 ～

在外教育施設に派遣された先生方の報告は、現地の特色を活かしながら実践された授業や貴重な体験ばかりでいつも勉強させていただいています。そのような素晴らしい実践とはほど遠いのですが、在外教育施設で努めた経験の中で大切だと感じたことを書かせていただきます。現地で生活する子どもたち(特に長く生活している子どもたち)の心の不安です。これから記す内容は、派遣された国によっては、また短期間の海外生活の生徒にはあてはまらないかもしれませんが、在外教育施設に勤務する方には知っておいて頂きたい、雑感として記します。私の報告は、この“雑感”がメインになります。

### (1)間違えた生徒指導 ～日本と海外、生活基盤には差がある～

赴任時は派遣教員の誰もが、海外で生活する子どもたちのために全力を尽くそうと思っているに違いありません。子どもたちが帰国するときに日本国内でスムーズに生活していけるように学習にも生活指導・生徒指導も力を入れて教育活動を行っていかうと思っているはずですが、しかしながら現地に住む子どもたちの現状を知らずに日本の生徒指導をあてはめようとする、現状にそぐわない指導になることがあると思います。強引に押し進めたとき、時として子どもたちとの信頼関係が崩れるだけでなく、保護者、教職員同士まで傷つく可能性があることを知りました。日本では当たり前と思えるモラルがほぼ否定され、型どおりの説明では子どもたちに伝わらないのです。授業はもちろん、学校生活も波乱に満ちた日が多く、学校職員と話し合いながら教育活動を行っていきましたが、とても苦しかったです。

### (2)独特な不安

中学生くらいになると様々な悩みをもちだします。海外で生活する子どもたちの中には、日本に暮らす子たちとは違った独特の思いがありました。

- ・自分は国籍が定まっていない。自分は将来どの国で生活するのか。
- ・日本は好きだが日本に永住することが自分にできるのか。
- ・自分の顔立ちは西洋人的だが日本で受け入れられるのか。
- ・日本語よりも英語の方が得意。
- ・日本の暮らしに憧れるがスイスにいないといけない。
- ・ドイツ語が苦手だがスイスで生活していかなければならないのか。
- ・日本語で自分の思いを上手く話すことが難しく、そんな自分に苛立ちを覚える。

などです。両親が共に日本人の場合は、上記の不安があてはまらない場合もありますが、自分の存在や将来への悩みは少なからずもっています。私は派遣前まで、海外に暮らす子どもは大変恵まれた環境で生活していると思っていましたが、このような不安を抱いている子どもたちに出会いました。

### (3)低下する教師への信頼

日本から来た熱い思いをもった教師が、「帰国してから日本の生活に適すことができるように」と生徒指導を一方的に行うと、生徒は戸惑います。

「スイスのことを何も分かっていない日本から来た教師（ドイツ語も話せなく、日本人学校のこと自分達よりも分かっていない新米教師）が、何もかも日本と同じようにさせようと、モラルもルールも無理矢理押しつけてくる。自分達をきまりで縛り付け、自由に活動する時間も制限してくる。」

という感覚が生徒たちにはありました。

さらに、

「教師より自分達が上である。スイスのことも学校のことも教師よりよく分かっている。」という思いもあります。行事活動は毎年同じ事を繰り返して、準備すべき事柄や道具のある場所も子どもたちの方が新派遣教諭より知ってます。

また、心を割って話せる友達ができないことで感情を共感し合えない辛さもあります。仲の良い信頼していた友達が日本へ帰国したり他国へ移っていく。新しい友達が日本人学校に編入しても数年でいなくなるという寂しさを何度も感じてきたのです。

#### (4) 日本国内と差があることを痛感した初年度。～子どもたちの苛立ち～

生活態度は荒れたものに見えました。先生方の要望にとっても敏感で、自分達の考えと違うときは強く主張します。

具体的な例を挙げると

清掃時間のフロアの雑巾がけは、雑巾を足で踏みつけながら拭き掃除をする。体育館に上靴に履き替えず土足で入る。

「なぜ小学生に強くボールを当ててはいけないのか。痛がっているが弱く投げているつもり。力があるんだからしょうがない。」

「なぜ現地採用の先生に対して悪口を言ってはいけないのか。本人はどうせ理解していない。」などと質問されたこともあります。

ここには書ききれないほどたくさんの衝突がありました。話しが理解してもらえず一番苦したのは、チームプレーや協力しながら作業する大切さを伝えることです。放課後のクラブ活動の時間、協力してプレーをするとか、小学生と一緒に楽しくゲームすることが難しいのです。(クラブは小学4年生～中学3年生まで合同。) 必ず勝敗にこだわります。負ける原因につながるプレーをした生徒を罵倒したり、審判役の教諭にミスジャッチだと真顔で刃向かってきます。そのためクラブ活動中は、嫌な空気に包まれます。機会がある度にチームプレイの大切さ等を先生方が説明していますが、理解してもらえません。そればかりか、日本の押しつけをしているといきり立ち、イライラしてる様子が身体の動きから伝わってきます。学級や係活動などで作業する際にも同等のことが起こります。

そして、このような感覚で長く対立していると、保護者たちまで不安にさせていきます。「もっと子どものことを分かって欲しい。」「子どもたちを制限しすぎる。日本で生活するのと違い、普段から制限された環境の中で生活しているのに、さらに子どもたちのやりたいことを奪い、縛り付けた生活をさせるのか。」などです。結果的には学校不信を募らせる結果になっていきます。

#### (5) 生活の現実が見えてきた。～我慢してきた子どもたち～

時間が経過していくうちに、スイスに住んでいて嫌に思ったことを彼らから聞くことができました。現地の子どもたちが、公園や下校時に嫌がらせをしてくるという話しです。日常生活の中で、様々な矛盾を抱えていることも知ることができました。実際に私自身も赴任地の生活に慣れるにしたがって、スイスの人達の生活習慣が日本と大きく異なり、日本では“いけない”と言われていることが、スイスでは平然と行われていることも分かってきました。例えば、現地の学校では10時くらいに中間食を食べても良いこと。(ただし野菜や果物に限る) スイスの人達は、朝6時頃から働くのが普通なため、朝食を軽く取り、昼食までの間に食事をするのです。店で果物を買って、歩きながら食べたり電車内で食べることも普通です。自転車の二人乗りは、親子でしています。スイスでは、家族でサイクリングを楽しむことが盛んに行われます。そのため二人用の自転車が発売されています。現地の学校では、机上に飲料水を置いて、授業中に飲んでも注意されません。私が通っていたドイツ語教室や英語教室では当たり前のことでした。

生徒たちが日本人学校内でやろうとしていることは、スイスの人達には普通のことであることが多かったのです。考えてみると外国で暮らす期間が長くなるほど、その国の習慣や風土が生活の基本になってきます。小さい頃からスイスに滞在している子にとっては、日本の考えの方が、馴染みの薄い外国の習慣なのです。



子どもたちは、登下校の最中や休日に近所の公園などで遊ぶうちに現地の子どもたちと接する機会が少なからずあります。現地の子は優しい子も多いのですが、やんちゃな子もいます。その子たちから理不尽な扱いをされてきていたのです。

現地のスポーツチームに所属して努力している生徒がいます。現地のコーチは、技術とセンスに優れた強い人を見つけて伸ばしていこうとする人が多いようです。そのため自分が“出来る存在”であることをコーチに示さなければならないのです。力のある選手は、メンバーの協力を頼らず、個人プレーで点数を稼ぐのが一般的ということも分かりました。日本人学校の生徒は、そのような環境の中で、言葉の違いや意地悪にも耐えながら「いつか自分も上手くなってやろう。」と努力してきたのです。チームプレイよりも自分をどれだけアピールできるかが求められている環境です。

現地の学校には清掃活動は存在しません。学校が業者を雇って清掃させます。現地の子どもたちはいつもプロが清掃してくれるきれいな環境の中で過ごしています。

外に出れば、現地の子たちからからかわれても「日本じゃやないから仕方がない」と耐えスイスの生活を受容しているのに、日本人学校ではスイスでありながら日本的なルールやモラルを守れと言われる。

そして、自分自身は何者なのか、どの国民になればいいのかという、アイデンティティの確立ができないことも追い打ちをかけます。

日本人学校では、生活面でも質の高さを求めるでしょう。でもそこに子どもたちの生活実態や不安などが見えていないと、子どもの心には素直に入りにくい指導になってしまうはずです。中学生の生徒指導を何年もやってきましたが、“なぜか”に気がつくのに時間がかかりました。

#### (6) 最初の取り組み ～二学期、生徒を信じて思いのままに活動させたこと～

「スイスにある学校なのに現地の学校の生徒たちのように自由にできない。さらに現地校の子どもたちからバカにされる。スイスにいながらなぜ日本の約束やモラルを守らなければならないのか。いつも自分は嫌な思いをしてばかり。」

「先生方は何も分かってくれていない。自分達を日本の規則で縛り付けようとしている。」

子どもたちのことが分かり始めると、何を伝えるべきかが変わってきます。子どもたちが今おかれている環境に一番適した助言が何であるか考え、話していくようにしました。

夏休み明けに「進学説明会」がありました。類接する国の日本系高等学校の先生方を招き、その高校の具体的な生活の様子や説明を聞く場です。その説明会に出席する彼らの姿に驚きました。服装も説明を聞く態度もきちんとできているのです。必要なときはわきまえてきちんと活動することができることを知らされました。ここぞというときに何をすべきか分かっているのです。このときから、もっと信じて任せてみようという気持ちに変わっていきました。

その後、学習発表会（文化祭）で何を行うか学級討議をする時間がありました。

去年までは、優れた教師の指導の下、素晴らしい劇や音楽の発表を成し遂げてきました。実際の歴史的背景を盛り込みながら、スイスと日本の文化の差を創作劇で演じたビデオを拝見したと

きには驚きました。

しかし今年、「自分達の学級の歌を作詞・作曲して、それをエアーバンド（模倣演奏）で披露したい。創作ダンスも披露したい。」というのが彼らの意見でした。担任の顔を伺っているのが分かります。全員がやってみたいという気持ちを強くもっていることは珍しいことなので、「皆が本気でやりたいならやってみなさい。」とゴーサインを出しました。高い教育活動が求められる日本人学校の中で大丈夫だろうかという不安がありました。喜んで子どもたちを見ると何とか実現させてあげたい気持ちになります。失敗を覚悟して、“自分達で本当にやりたい発表を考え、協力しながら実現させる中学生らしい経験”をさせてあげたいと思いました。

「許可されないと思っていたことを、認めてもらえた。」それ以降、彼らは本気になって活動し始めます。連休中でも互いに連絡を取り合い、ファーストフード店のテーブルの上にジュース1本注文し、何時間も打ち合わせをします。活動中、仲間を中傷することが無く、友達の意見にも耳を傾け、意見を出し合い作成していきました。（それまでは珍しいことでした。）

完成度は高くなかったかも知れません。しかしながら、仲間と修正を加えて何度もやり直し、期日に追われながら自分達の手で作上げた力作でした。保護者の中には「ありがとうございました。家に帰ってからも毎日努力して、こんなに真剣に何日も取り組んでいたのは初めてでした。」と話して下さる方もおられました。

#### (7)翌年の様子

子どもたちの考えや生活姿勢は激変するものではありません。でも少しずつ、何が大切なのか、日本の精神の素晴らしさは何か感じだしてくれたように思います。ことある毎に様々な指導は繰り返していきますが、子どもたちの辛さを知ってからは、私の話し方や伝えるべきことも変わりました。

翌年の担任の先生は、子どもたちとの対話を重んじ、少ない人数でも様々なことに挑戦させていきました。子どもたちがどんどんプラス思考に転じていきました。児童の面倒見も良くなり、様々な行事活動も責任持って仕切り出しました。全校児童生徒数が減っても本来の力を出して、元気よく活動していくようになっていきました。

児童生徒の活動目標の中に、児童・生徒が主体的に活動する機会を増やし、失敗しても協力しながら取り組んでいく活動を支援し、見守ることも取り入れました。

そして、学校長も含めた日本人学校の職員全員で子どもたちを認め、励まし、休み時間には共に汗を流して、教育目標を実現させていくことができました。

チューリッヒ日本人学校で学んだことは数多くありますが、生徒指導の前に生徒理解があるということを実感できたことは習得でした。そして生徒理解は、常識にとらわれてはいけないということ学びました。

現在の課題は、派遣国で貴重な体験と学習をしてきましたが、それを日本の子どもたちにどのように還元することができるかが課題です。生活して初めて実感できたたくさんの事柄は、日本しか見えていない、子どもたちには、実感させるににくいことばかりです。